護国の鬼

水沢玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
護国の鬼

【Ｎコード】
Ｎ９６８７Ａ

【作者名】
水沢玲

【あらすじ】
昭和二十年七月、太平洋戦争末期。日本全軍に特攻の狂風が吹き荒れていた。特攻によって家族の仇討ちを誓う斉藤と、特攻そのものを否定する高原。相反する感情を抱えた二人の男の苛烈な物語。

一章　辭令

昭和二十年七月　鹿児島・鹿屋飛行場

草原に寝転がり、何を見るともなく空を眺めていた高原茂は、自分を呼ぶ声に気づき体を起こした。視線の先には一人の男が立っている。灯火管制の暗闇につつまれて顔は良く見えないが、高原にはその影の持ち主がわかった。

「なんだ、斉藤か」

「となり、いいか？」

斉藤孝助はテニアン配属以来の戦友である。童顔のためか少年と間違えられることが少なくない斉藤だが、実際は高原と同じ十九歳であり、空にあっては歴戦の勇者として獅子奮迅の活躍を見せる。地上にあっても健在のその強引な性格をすでに呑み込んでいるのか、高原は何も言わず、斉藤もことさらに問わない。座り込んだ斉藤はしばらく一言も発せず、高原と紅い空を眺めた。

これは夕焼けではない。太陽なら二時間ほど前に西の地平線に没している。不思議な現象だが、高原も斉藤も、そして見ている誰もがこれを奇特な光景とは思っていない。

「今日はどこがやられた？」

高原がつぶやくように尋ねた。なにが、とは言わなかったが、相手には通じた。

「ああ、都城だけだとさ。今日はやけに少ないな」

「四国沖で出張っていた機動部隊が東に移動したからな、おかげでこっちにまで手が回らなかったんだろう」

「儲けた、といっていいのかな。その分東海や関東が余計に割りを食ってるんだろうからな」

「……だろうな。噂じゃ小田原が空襲されたって言ってるが」

昭和十六年の開戦から三年半が経過し、一時は太平洋の西半とイ

ンド洋の東半とを完全に制圧したかに見えた大日本帝国であったが、自らの失策とアメリカ軍の犠牲をいとわぬ物量攻勢の前に転進と称した後退を重ね、十九年の末にはフィリピンの陥落をもって本土に押し込められた。４月には戦艦大和を基幹とした最後の水上部隊が壊滅し、つい一ヶ月前には沖縄が陥落した。日ごと、夜ごと繰り返される空襲の業火は日本全土を嘗め、いまや原型を保っている都市といえば京都や広島など数えられるのみである。２人の会話が暗くなるのもやむを得ない。ふと、何かに気づいたように斉藤は話題を変えた。

「それより、どうしたんだ？酒井司令に呼ばれたきり帰ってこないもんだから、何かやらかしたのかと噂してたとこだぞ」

「別にそういうわけじゃないって。明日付けで中尉に昇進らしい」

他人事のように言う高原の表情は硬い。

「へえ、おめでとう。一足先に昇進ですか、中尉どの」

高原は、しかし斉藤の軽口に反応しなかった。彼の表情は暗闇のため斉藤には見えなかったが、明らかに様子のおかしい高原に、斉藤は怪訝とならざるをえなかった。

「おい、高原……」

「……もう一つ。同じく明日付けで、神風特別攻撃隊に編入が決定した」

斉藤の口が、凍りついた。

二章　抗議

特別攻撃とは、字義に則った広義の意味では「特別な任務を帯びた攻撃」となる。だが、今日の日本で特攻といえば、第二次世界大戦末期に使用された特殊な攻撃法を指す。すなわち、航空機に積める限りの爆弾を搭載し片道分のみの燃料を積んで出撃し、自らを乗せたまま敵艦に飛行機ごと突入する「神風特別攻撃隊」をはじめとする自爆攻撃である。

「特攻？　お前が？」

「そう。俺が」

「俺じゃなくて、お前が？」

「そうだ」

愚にもつかない問答を繰り返したのは、斉藤の受けた衝撃の大きさを物語っていた。

「それで……受けたのか？」

「ああ、受領した。拒否できるようなものでもないからな、これは」

「……本気か？」

「おれは伊達と酔狂で命を捨てられるほど人生を達観していないぞ。やるからには全力を尽くすさ」

高原の口調は朝食に卵がつかなかったことを嘆くのと大して変わらず、つい先ほど「命を捨てろ」といわれたとは思えないほど淡々としていた。

「おい、どこへ行くんだ」

高原の言葉を、斉藤は聞いていなかった。憤怒の表情をたたえ、暗闇のなかを走っていく。この時期、搭乗員の質は開戦時とは比べるべくもないほど低下しているが、それでも目のよくないものをパイロットにすることはない。まして斉藤は幾多の実戦を切り抜けてきた撃墜王（エース）である。漆黒の闇も彼の足の運びを危うくすることはな

い。
やがて、斉藤はある建物の前で急停止した。ドアの横には小さな標識がかかっている。そこには「五〇三空司令室」と書かれていた。
五〇三空司令官の酒井昭次郎大佐は水雷、つまり魚雷攻撃の専門家で、任官以来巡洋艦や駆逐艦の水雷科を歴任してきた。今年の三月まで軽巡「矢矧」の艦長を務め、五〇三空の司令に転属した。そのため司令職にありながら航空に関してはまったくといっていいほどの素人である。だが、そのようなことは珍しくはない。海軍航空の歴史自体が浅いため士官、特に大佐や将官には航空の出身者がほとんどいない。実際の指揮は少佐の飛行長や航空参謀がとるので、トップが航空畑である必要はないのだ。それに、たとえ仕事が事務処理しかないとしても、酒井としては不平のもらしようがない。すでに、日本には動かせる艦がないのだ。
「斉藤少尉、入ります！」
書類整理をしていたらしい酒井に、敬礼もそこそこにさっさと本題に入る。
「大佐、高原少尉、じゃなかった中尉を特攻隊に編入すると聞きましたが」
「ほう、耳が早いな。本人から聞いたか」
「……なぜ彼なんです」
「さあな、私は辞令を渡しただけだ。当然、その前に本人の意思を確認しているが」
酒井には斉藤の言いたいことがわかっている。わかっていてあえてとぼけているのだ。
「高原中尉は前から特攻戦術に対する反対意見を具申しています。特攻に反対の者をなぜ使うのですか」
「貴様はなぜだと思うのだ？」
斉藤を試すような酒井の問いだった。それとわかっていながら、斉藤は最短経路を選んだ。もともと回りくどいことは嫌いなのだ。

「反対者を減らす……こう言わせたいのですか」
「本当のところはわからんがね」
はぐらかしておいてから、酒井はやや表情を改めた。
「まあ、当局にまったくその意図がないとは言い切れんな。だが、この人事にはもうひとつ重大な示唆がある。わからんかね？」
斉藤は少し考え、沈黙をもって問いに答えた。
「わが軍は本土決戦に備え、極力技量優秀な搭乗員を温存してきた。たとえば台湾沖航空戦を戦い抜いた貴様や高原のような、だ。だが当局はその了解を崩してきた。つまり、いよいよ搭乗員が払底してきたということだ」
沈黙をたもっていた斉藤は、口を開いた。一度開くと火山弾を撃ち出す噴火口のような勢いだった。
「ならば、せめて希望者のうちより募るべきでしょう！小官は数度にわたり特攻作戦参加の請願書を提出していたはず。それを経験豊富な搭乗員を失うのは困るといって握りつぶしてきたのは大佐、あなたです。特攻の任には小官が当たり、高原中尉にはその護衛を命ずるというのが妥当ではないのですか！その程度の柔軟性も、わが軍は持ち合わせておらんのですか！？」
斉藤の言には軍批判が含まれており、追及されれば譴責処分は免れない。だが酒井はにやりと笑っただけでとがめなかった。
「そこでだ、斉藤少尉。貴様に重要な任務を与える」
「重要任務？攻撃隊の道案内ならごめんこうむりますよ」
「似たようなものだな」
酒井の説明が進むにつれて、斉藤の胸の奥から理解と驚愕の念がわき起こった。それは特攻そのものよりも壮絶で、辛いものだった。

三章　任務

特別攻撃隊は通常、主力である攻撃隊と護衛の直衛隊からなる。直衛隊が雀蜂のごとく殺到する敵戦闘機を防いでいる隙に攻撃隊は敵艦隊へ接近し、対空砲による妨害を避けつつ敵艦へ突入。基本的な戦法は四年前と変わってはおらず、ただ特別攻撃であるから攻撃隊は帰還を考慮する必要がない。つまり墜落しない限りは機体が損傷しようと燃料がなくなろうと関係ないわけで、ある意味では成功率は高い。問題は攻撃後に戦果が確認できないことである。通常攻撃であれば、攻撃した機自身が自分の放った魚雷や爆弾が命中したかを確認する。昭和十九年十月の台湾沖航空戦では未熟な搭乗員が攻撃した艦をすべて「撃沈」と報告し、その後のフィリピン攻防戦に大きな混乱を招いたが、特攻では攻撃した本人はその瞬間、跡形もなく粉砕されている。地上の司令部としては信憑性の如何にかかわらず情報がなければ今後の作戦立案のしようがない。そのため、攻撃隊には戦友の死を最期まで見届け、その成果を報告するために一機ないし複数機を帯同させる。すなわち「戦果確認機」である。

「その戦果確認の任を、貴様にやってもらいたい」

他人事のように言う酒井を、斉藤はいらだたしげににらんでいる。

「しかし、戦果確認機の任務は攻撃隊より難しいというのはご承知のはずです。敵艦に突入して終わりの攻撃隊と違い、戦果確認機はそこからさらに敵の重囲を突破して帰還しなければなりません」

「もちろんだ。戦果確認機は必ず帰投せねばならん。戦果によってはただちに追撃を加えて戦果を拡充する必要がある……といっても予備戦力などどこにもないがな。いずれにせよ情報の重要さは変わらん。だからこそ貴様がこの任にあてられたのだろう？」

「この任務は自分よりも高原中尉のほうが適任と思われます。編成の変更を進言します」

「却下する。高原中尉の攻撃隊編入についてはすでに決定している。航空隊司令の権限では変更はできん」
「しかしながら、高原中尉は冷静沈着、短気な自分に比べ生存可能性は……」
「不可能だといっとるだろう」
たしなめる、というよりどこか突き放した口調だった。
「その程度のことはすでに五航艦（第五航空艦隊）司令部に上申しておる。そのうえで言っておるのだ。あきらめろ」
「……ならば、この任務、拒否させてもらう」
「それも無理だな。今から貴様ほどの技量を持つ搭乗員を探すことなどできん」
「当日に高原と乗機を換える。そうすれば問題ないだろう」
「そして死んだはずの高原中尉が戻ってくるのか。事実はどうであれ、周囲からは「死に怯え逃げた」といわれるぞ。高原に汚名を着せるつもりか？」
斉藤は絶句した。自分の思考の盲点を突かれたのだ。自分が身代わりになることだけを考え、自分がいなくなったあとのことは考えていなかった。
「……やつは汚名を受けてでも生き残るべき人間だ。俺とは違う」
「仮に立場が逆であったら、高原も同じように言うであろうな」
酒井の言は正しい。それがわかるだけに余計に腹立たしかった。
単純ならざる表情で形だけの敬礼を施し、床を踏み抜かんばかりの勢いで司令室を出て行く。その背中を見ながら、酒井は気づかれないように小さくため息をついた。

幕間　七夕の業火

「ちくしょう！」

暗闇の向こう、はるか遠くにうっすらと浮かぶ鯨のような巨体。今夜はじめて手合わせした、確かボーイングＢ－２９だったか。米軍の中で「空の超要塞」という愛称で呼ばれていると噂に聞いたことがある。そのあだ名が的外れなものでなければ誇張ですらないことを、焦りと痛恨の思いをもって実感していた。

中高度において無類の軽快さと安定性を兼ね備える零戦の「栄」エンジンは、一万メートルという未知の超高高度で本来の性能を発揮しえないでいる。高空の酸素不足であえぐエンジンをだましだまし、叱咤しながら必死に鯨の群れを追う。だが、鯨たちは速かった。低高度で飛んでいるのと変わらない速度で、悠々と目的地へと飛行している。

「あいつら、なんてエンジン抱えてやがるんだ！」

酸素マスクのなかで毒づく。すでに編隊は三浦半島の南端をかすめ、富津岬を前方に臨みつつ浦賀水道の上空に入らんとしている。

このまま進めば、大都市・千葉が横たわっている。六月十日に郊外の日立製作所が爆撃されたが、現在のところ市街地は健在である。そこに、三月の東京大空襲に匹敵するほどの数のＢ－２９が殺到すれば……

「くそ……このままやらせるわけにはいかねえぞ！」

後続の氷室曹長機に向かってバンクを振ると、右に操縦桿を倒し、機首を傾けた。

小笠原列島線に展開された警戒網の警報を受けて館山基地より出撃した迎撃部隊は、大島南沖上空で北上中の編隊を捕捉した。

正面上方から降下しつつ銃撃を加えた部隊は激しい防御砲火の壁に衝突し、砕け散った。一機も落とすことができないまま、何事も

なかったように飛び去ろうとする鯨の群れを、彼らは編隊を解いて各個に追撃した。健在機の集合を待っていては追いつけない。もはや組織だった戦闘は不可能だった。

三機の僚機のうち本多曹長機は機体を蜂の巣のようにして爆発四散し、長山一飛曹機はエンジンから火を吹いて降下していった。館山に向かったはずだが、たどり着けたかはわからない。

それでも４機同時に一機に集中攻撃を加え、少なくとも１０門以上の１３ミリ機銃から放たれる火線に自身も数ヵ所に被弾しながら相当量の２０ミリと７，７ミリを叩き込んだ。小型の艦攻ならば翼の端まで粉々になるほどの数を命中させた。

ところが、落とせなかった。以前にヤップで撃墜したＢ－１７をはるかに凌駕する防御力の前に、零戦の火力はあまりにも無力だった。

「火力を上昇させた邀撃機の開発を怠ったのは航空本部あたりの責任だが……」

房総丘陵上空まで迂回し、高度を一万二千にとる。そこに……あった。機が浮揚感に包まれ、加速する。強い気流に後押しされ、機種を北北西へ回した。

一週間前に館山に赴任したとき、館山空の古参の搭乗員からその気流の存在を聞かされた。その搭乗員は今、大島沖で眠っている。彼の形見を、無駄にはできない。

すでに鯨の群れは富津岬を越えているはず。ぎりぎり間に合うかどうか。

「お袋と洋子が待っているんだ！」

千葉の生まれである彼の父親は、海軍士官として空母「瑞鶴」に乗り組んでいた。今家に残っているのは母と１２歳の妹。疎開の話が出たとき、母は家を誰もいない空けるわけにはいかないといって、妹はそんな母を置いていったらかわいそうと、二人とも家を動かなかった。今となってはそんな彼女たちの健気さが恨めしい。他人のことなど知らない、自分の命が大切とさっさと逃げ出してくれてい

れば、今の苦悩はないのに……

「見えた！鯨だ！」

編隊は海岸線沿いに木更津を越え、まっすぐに千葉へと向かっている。予想通りの針路だ。氷室曹長にバンクで敵編隊発見を知らせると、緩降下で加速をつけながら右舷前方へ回り込む。

『鯨どもの頭を抑え、二時方向、高度差一千から急降下して一機を集中して叩く！よろし？』

実は、零戦には無線機をつんでいない。ないことはないのだが、性能劣悪なうえに重量がかさむため、たいていの零戦搭乗員は重量軽減のためおろしてしまっている。ではどうしたのかというと、左に並んだ氷室機に対し手信号で伝えるのだ。氷室はこれに微笑しながら敬礼で答えた。それに軽く頷くと、一気にスロットルを押し込んだ。

鯨の群れの後ろには、数十の雀蜂が群がっている。零戦や雷電、彗星夜戦に陸軍機も出ている。おそらく最後の防衛線として待ち構えていたのだろう。両軍の間で交わされる銃撃は、どこか幻想的な美しさがあった。

下からは高射砲が盛んに撃ち上げてくるが、それらは無駄だとわかっている。現用の高射砲では八千メートルまでしか届かず、鯨たちのはるか下方でむやみに黒い徒花を咲かせることしかできないのだ。

そんな無駄撃ちするぐらいなら戦闘機に金回せ、と心の中で味方を罵倒しながら、ところどころに浮かぶ雲を利用して気づかれないように接近していく。

「よし……行くぞ鯨ども！」

これまでの数時間に及ぶ追跡劇はようやく報われた。真下に見える一機めがけ、急降下を駆ける。鯨もようやく気づいたらしく、一門の機銃が発砲したのを皮切りに一斉に火を吹き始めた。

「遅い！今ごろ気づいたか！」

たちまち風防の外は紅い火線に囲まれた。時おり鈍い衝撃が走る。

だが、急降下に入ってしまえばこちらのものだ。機体が振動し、空中分解しかねないほどの速度をつけた零戦に、敵の旋回機銃はそう当たらない。後ろに氷室機も続いている。振り向いて確認する余裕はないが、殺気がこっちまで伝わってくる。そして。

四門の機銃が火を吹き始めた。２０ミリが、７，７ミリが鯨の主翼の付け根に吸い込まれる。

ところが、主翼の２０ミリ機関砲が突然沈黙した。

弾切れだ。威力も大きいがその分弾薬が少ない２０ミリを大島沖の空中戦で消耗していたことを失念していたのだ。もう少し引き付けてから撃つべきだったかと後悔したが、いまさら引き返せない。めくらめっぽうに７，７ミリを撃ち続ける。

いよいよ防御砲火の網が緻密になる。ついに翼端から出火した。風防には数箇所に弾痕が穿たれている。とにかく撃ち続けた。一機でも減らす――たとえ命と引き換えにしても。

ついに鯨のエンジンの一基が炎上し、ぐらりとバランスが崩れる。

やったと喜んだ次の瞬間、胴体前部に飛び込んだ一弾がエンジンを出火させた。小さな爆発で破片が飛び散り、操縦者の左肩を貫いたが、長時間にわたる戦闘で興奮していた身体は痛覚を脳に伝えなかった。

そのまま鯨の巨体の横をすり抜け、墜落に近い状態で降下を続ける。朦朧として見上げた目に集中砲火を受け火達磨になった氷室機が映った。

そこで脱出すれば氷室曹長は助かったかもしれないが、彼はその手段を選択しなかった。そのまま最後まで機を操り、Ｂ－２９を巻き込んで見事な最期を遂げた。

そこから彼の記憶はない。気がついたのは館山基地の医務室だった。あとから聞いた話によれば、彼の機はエンジンを止めたまま滑走路に滑空し、蜂の巣の機体で胴体着陸した。そして、基地要員によって彼が救助されたあと、力尽きたように爆発したらしい。

しかし、彼の脳裏には、燃え盛る故郷の姿だけが、鮮明に残っていた。

二日後、彼は五〇三空の転属と鹿屋基地への進出を命ぜられ、館山を去った。

１９４５（昭和２０）年7月7日深夜、千葉にＢ－２９爆撃機１２９機が来襲。三時間にわたる爆撃により、６月１０日の空襲とあわせ市街地の七割が焼かれ、都市機能をほぼ喪失。死者は１２００人を超えた。後世、空襲を受けた日の暦にちなみ「七夕空襲」と呼ばれる。

幕間　七夕の業火（後書き）

当初の構想ではこの話はいれず、所々で回想という形で取り入れようと思っていましたが、どうしても思うように行かず、いっそ独立させてみようと言うことで書いてみました。回想部なのに文字数が前三章と変わらない・・（汗　話が膨らみすぎました。

四章　酒宴

七月二十八日午前七時十四分、鹿屋基地より偵察のため発進した一式陸上攻撃機が鹿屋基地の南東２００海里の海域に空母４、戦艦２などからなる米機動部隊を発見。直後に通信途絶。

同午前十時十分、鹿児島市街地および国分基地に艦載機１６０機来襲。

同午後二時三十分、第五航空艦隊司令部より明日黎明を期して攻撃命令発令、第六神風特別攻撃隊および五〇三空に対し作戦待機命令。

夜。鹿屋飛行場の裏手に並ぶ、バラックの一つは奇妙な陽気に包まれていた。薄暗い部屋の中では、数本の酒瓶を囲んで六十人ほどの男が飲めや歌えのどんちゃん騒ぎをやっている。その片隅で飲んでいた斉藤の隣に、酒瓶を抱えてどっかと座った男がいる。高原だった。

「聞いたぞ、お前が戦果確認機だって？」

「……ああ」

「それなら安心だな。誰にも知られることなく死ぬのはできればごめんこうむりたいからな。俺の最期、しっかりと見届けろよ」

明るく笑う高原の顔には一片の悲壮感もなく、普通に見えた。日常の彼以上に。

「高原、ちょっといいか？」

「どうした？」

「……お前、本当にそれでいいのか？」

高原は答えなかった。代わりに酒の入った素焼きの湯呑みを置き、斉藤の眼を見据えた。

斉藤の知っている高原はいつも言葉少なで、笑うことも少なかった。
大戦果を告げる大本営発表に沸く将兵の中でも頬を緩めることすらなかったし、長年助け合ってきた戦友の死を伝え聞いても眉ひとつ動かさなかった。
感情がなかったのではない。死に対して敏感すぎるがために、あふれる激情を無理にでも心の裡に押し隠し、無表情を装ったまま敵機を撃墜してきた。
去年の台湾沖航空戦、万に一つも生還は期せない絶望的な出撃にあってもその仮面は剥がれなかった。無表情のまま離陸し、そして着陸したときも無表情だった。負傷した右の脇腹をおさえながら乗機から飛び降り、同じく無事に帰投した斉藤に向かって「やっちまった」と苦しそうに片目をつぶって笑いかけた、その一瞬だけ彼の鉄仮面が取れたのかもしれない。その、死と殺人の恐怖に満ちた素顔。それを知るおそらく唯一の人間である斉藤には、今の仮面は見るにたえなかった。
「お前、確か恋人がいたよな。ええっと……沙織さんだったっけ」
「ああ。お前の所は母親と妹さんがいたんだよな」
「いや……二人とも七日の空襲で死んだらしい」
「……それは、悪いことを聞いたな」
「そんなことはどうでもいい。お前には沙織さんが居るんだろうが。彼女を残していくのか？」
「仕方がないだろう。まさか一緒に行くわけにもいかんしな」
斉藤はどうにも腹の探りあいというのが苦手だった。特に高原に対してはつい直情的になってしまう。もっともその単純な、純粋な感情表現が高原にとっては快くも感じられるのだ。一見相反する性格の持ち主である二人が類まれなる僚友であるのは、空戦の相性だけによるものではない。
「わざわざ五〇三空から緊急に異動を発令し、中尉に昇進のうえ飛行隊長に抜擢。普通じゃあない人事の裏は気づいてるだろう、お

前も」
「そりゃあな。あえて中央の方針に異論を唱えていたんだ、煙たがれるのはむしろ誇りとするところだ」
「ふん……日本の将来を憂うと言いながら上から命令されれば唯々諾々として従う、気様の信念など緒戦はその程度のことだったか。底が見えたな」
高原は無言で立ち上がった。斉藤を見下ろす眼には鋭い眼光が宿っている。斉藤の挑発はどうやら臥龍の逆鱗に触れることに成功したようだった。
「では聞くが、日本は戦争を続けて勝てると思うのか？」
周りで聞き耳をたてていた数人が息を呑んだ。この時期、この場でこの相手に向けて放つには危険すぎる問いだった。あいにく斉藤は「全将兵一致団結して敵に当たれば我が大日本帝国軍の勝利は疑いなく……」などという通り一遍の一般論でお茶を濁すような人間ではない。
「この際勝ち負けなど問題じゃない。だが、この状況で無条件降伏なんてしてみろ、日本は滅ぶぞ」
先の大戦で敗れたドイツが連合国にどのような仕打ちを受けたか。その惨状を聞き知るものには日本が無条件降伏するなど考えられなかった。
「ではここから劣勢を一気に覆すことができるのか？」
「元に戻すことはできなくとも、敵の戦力が途切れるまで粘ることができれば講和に持ち込むことができるだろう。違うか？」
「無理だな」
高原のそっけない口調に、わずかながら熱がこもってきたようにもみえる。
「出すにことかいて練習機の赤トンボまで特攻に駆り出している我が軍のどこから戦力を持ってくるんだ？打ち出の小槌を振れば何百機もの零戦が湧いてくるわけではないぞ」
「……確かに押し返すだけの戦力はないさ。だが、現在の状況で

降伏するなど危険すぎる！」
「そういってマリアナ戦から現在に至るまで講和の努力を怠ってきたからこそ内地まで追い詰められたのだろう。講和の時期を一ヶ月遅らせた所で戦況は変わらん。一年後には日本という国家が世界地図から消滅しているかもしれないのだぞ！」
周囲の人間が雷に撃たれたように動きを止めた。高原はついに禁忌の箱を開けた。上官や憲兵に聞きとがめられれば譴責どころの騒ぎではない。だが高原に止めるつもりはもはやなかった。
「いまや敗戦は免れない。問題はその後だ。焦土と化した日本を復興するのは誰だ？少壮の若者や次代を担う子供たちをこれ以上殺してどうするんだ！」
「その前に日本がアメリカに占領されちまったら復興もくそもねえぞ！」
「これ以上戦争を長引かせればソ連も出てくる！日本列島が列強の草刈り場と化す前にどんな形でもいい、早く終戦に持ち込んで百年の計をはかるべきだ！」
いつの間にか部屋の中にいたほぼ全員が高原に詰め寄っていた。彼らも必死だった。高原の言い分は理に拠れば正論ではあるが、それを認めることはできない。彼らは明日死ぬ。高原の主張を認めれば、自分たちが死ぬべき理由がなくなるのだ。一人がたまりかねたように声を上げた。
「だとしても、だとしてもだ！アメリカに好き勝手をやらせたら、日本民族がなくなるかもしれないんだぞ！ユダヤ人のように、恥も外聞もなく世界中をさまよわせることになるかもしれないんだぞ！」
「ユダヤの民族は二千年間世界を放浪し、なお民族たりえている。恥や外聞なんてものはあとからついてくるもんだ。一億玉砕なんてやってみろ、五十年後には日本という国があったことなど忘れ去られるぞ！」
それに対して別の男が反論しようとした、そのとき。
「邪魔するぞ」

入り口にかけられていた筵が揺れ、作業服姿の男が入ってきた。その顔を見た一人が悲鳴に近い声を上げ、それを聞いた全員が声もなく立ちすくんだ。誰もが見覚えのある顔。そして今もっとも見たくない顔であった。

「う、宇垣司令長官……」

出撃のたびお立ち台の上で声を張り上げている人物。第五航空艦隊司令長官、宇垣　纏（まとめ）中将だった。

ただでさえ余人に聞かせるには危険すぎる議論、よりによって相手は南九州に展開する全航空部隊の長であった。ほとんど本能的に敬礼し、直立不動の体勢をとる彼らに、宇垣はにやりと笑いかけた。

「諸君らの心のうち、聞かせてもらった」

部屋の空気が凍りついた。

四章　酒宴（後書き）

かなり遅くなりましたが、ようやく四章です。
「酒の席での口論」ですので、議論としてはまとまっていませんが、
だんだんと盛り上がったところでよりによって艦隊司令官の登場、
さあこのあとどうなる……
そろそろクライマックスに入っていきます。気長にお読みください。

五章　衝突

皇国の敗戦を公言し、「その後」を議論する。

民間人がそのようなところを見つかれば直ちに特高警察に拘引され、拷問のうえ大抵は「社会主義者」などのいわれもない名を冠せられて「獄中で病死」という形で処刑される。

軍人であればさすがにそんなことはないが、それでも降格のうえ閑職に左遷、ないしは「戦死」や「事故死」ということは十分にありえた。

初めから覚悟のうえであった高原や斉藤はともかく、二人に乗せられた他の隊員たちは最悪の展開を予想して蒼ざめた。特に激昂して叫んだ一人は唇をわななかせ、立つこともおぼつかない様子だ。

「長官、申し上げます。先ほどまでの隊員の発言はすべて小官の恣意によるものであり、責任は全て……」

言いさした高原を、宇垣は笑いながら手を振って止めた。

「なに、心配せずとも諸君らの罪を問おうなどと考えておるわけではない。私はただこいつを差し入れに来ただけだ」

そういって小脇に挟んでいた日本の酒瓶を樫の机に置いた。

「は、はあ……どうも」

軍の幹部は大体あだ名を持っている。暇をもてあました部下たちが好き勝手に考え出すためだ。宇垣の場合は「黄金仮面」。何事にも動じないその冷徹な性格を揶揄してつけられたものであり、高原が似たようなあだ名を持つのも似たような理由からで、ただ黄金でなく「鉄仮面」であるのは、さすがに中将と比べ貫禄が足りないということだけらしい。

その高原にしてからが気の抜けた返事を返すことが精一杯だったのだから、他の者は唖然として、座れと示す宇垣の手に反射的に敬礼を解いて雑然と座り込んだ。

「まあそう固くなるな、無礼講だろう。ほれ、まず一杯」
「はあ……いただきます」
宇垣自ら隊員の湯呑みに注いで回る。恐縮しながら一口飲んだ下士官が、思わず感嘆の声を上げた。
「……うまい。こんないい酒を？」
さすがに一等酒ではないが、これに比べたら先ほどまで飲んでいた戦時中の粗造酒など泥水のように見える。この時期にこれほどの銘酒を手に入れるのは至難の業であろう。

「それは良かった。こいつはな、軍令部の大西瀧次郎が送ってきたものだ」
「あ、あの大西瀧次郎中将閣下が我々にでありますか！？」
まったく、人生に驚きの種は尽きないらしい。宇垣といい大西といい、彼らにとっては訓令のとき顔を見る程度の雲上人である。その一方が目の前で親しく一搭乗員に話しかけ、他方が自分たちのために酒を贈ってくるなど昨日までは想像もつかなかった事態だ。

「うむ。やつは酒を飲むのも好きだがそれ以上に集めるのが好きでな、自宅に酒蔵を持っていたほどだ。そのなかから特攻隊の出撃のたびに隊員に銘酒を選んでおくってくる。やつなりの誠意だろうな」
大西瀧次郎中将といえば戦前は航空派の最強硬派の一人であり、今では特攻戦術の生みの親として名高い。

昭和十九年十月のフィリピン攻防戦の際にフィリピン群島の防空を担当する第一航空艦隊の司令長官であった彼は、水上部隊のレイテ湾突入の前に、壊滅状態であった航空戦力を有効に使用するため零戦に特殊爆装を施し敵艦に突入する戦法を考案した。
実際のところ体当たり攻撃そのものはそれほど独創的なものでは

なく、被弾や燃料切れなどのやむを得ざる理由により自発的に敵の軍艦や施設に自爆攻撃をかけた例は日本軍に限らず多々あり、組織的な特攻にしても考えていたのは大西だけではない。

だが、実際に高級指揮官が特攻を立案し、部隊を組織し実行したのは大西中将が最初であり、彼はそのことを忘れてはいなかった。来たるべき刻が来れば相応の形で責任を取るつもりであり、特攻隊に秘蔵の銘酒を贈るのもその一つの形である。

全員に酒を注ぎ終わった宇垣は床にどっかと座り込んだ。

「さて、諸君。高邁な意見を聞かせてもらった。軍令部でこれほどの建設的な議論が交わされたならばな……まあいい。この際だ、私も胸襟を開いて話をしよう。訊きたいことがあるならば腹蔵なく答えよう。多少軍機に触れようがかまわん」

銘酒によって少しばかり喧騒を取り戻した小屋の中はたちまち静まり返った。

宇垣の発言を正直に取れば、先ほどの過激な口論を咎めるどころか自ら参加しようというのだ。何かの罠ではないかと疑い、ためらうのも無理はない。

だが、明日にはいなくなる隊員たちとは違い宇垣は軍の中枢を担う幹部であり、軍事機密を明かして危険になるのは彼のほうである。それに、すでに立ち聞きした内容で罪状としては充分なのであり、わざわざ罠など張る必要はないはずだ。それでもしばらく躊躇したあと、丸顔の少年がおずおずと口を開いた。

「あの……高原中尉が言っていた、ソ連が参戦するというのは本当でありますか……？」

「残念ながら、ほぼ確実だ。陸軍からの情報によれば、ソ連はウラジオストック、チタなどシベリア各地に兵力を集結させつつある

ようだ。その数は百万を下らないという」
「ひゃ、百万！？」
想像を大きく超える数字に、思わず息を呑んだ。日露戦争のときのロシア軍は一つの戦場に四十万以上の兵力を集結させることはなかった。日本軍はさらに少なく、二十数万が限度であった。それを遥かに超える兵力が集結しているというのだ。
この時期、日本陸軍は本土決戦に備えて三百万人の動員計画を立てている。しかし、それは文字通り「動けるものは根こそぎ使う」日本の国力を総ざらえにした最終決戦用の兵力であり、訓練など施しようもないため、ゲリラ戦や地雷を抱えての特攻ならともかく正面から会敵すれば数字ほどの戦力は発揮できない。
それにひきかえ、ソ連軍はみな優勢なドイツ軍と互角に戦い抜いた精鋭であり、特に戦車集団の戦力はあのドイツ機甲師団にもひけをとらない。南方に戦力の大半を引き抜かれている関東軍では勝負にすらならないだろう。

広大な満州の大地がソ連戦車の轍に覆われていく様子を想像して、彼らは身を慄かせた。

「ペトロパブロフスクなどの海軍根拠地にも相当の数が集まっている。おそらく南樺太と千島を席巻し、あわよくば北海道、本州をうかがおうというのだろう。これをとめるだけの戦力は、わが軍にはない」
「し、しかし、わが日本とソ連の間には不可侵条約が結ばれております。一方的に条約を破ることはソ連の国際的な信用を失うことにつながるのでは……」
声を震わせながらの少年の必死の反論だったが、宇垣は一息のうちに粉砕した。
「ソ連自身、独ソ不可侵条約を一方的に破棄されておる。第一、

条約の不履行はロシアの十八番ではないか。負けた後に万言をつくして抗議したところで一笑に付されて終わりだ」
俯いて沈黙した少年に代わり、精悍そうな青年士官が声を出した。悲痛な響きがあった。
「では……我々はなぜ戦っているのですか？なぜ明日死なねばならないのですか？負ける戦とわかって……なぜですか！」
彼は俯いている少年を指さして叫んだ。
「こいつの両親は、満州の新京で医者をやってるんです！ソ連軍が侵攻すれば、間違いなく巻き込まれるんですよ！今戦争を終わらせれば満州の数百万の日本人は助かるんですよ！つまらない意地とやらで彼らを見殺しにするんですか！？」

宇垣は腕を組んで青年を見据えたまま答えない。数瞬、睨み合いが続いた。
「……国家というものは勝手なものだな。大を救うために小を切ることをいとわぬ。本来、国家権力は力を持たぬ少数を守るために存在するはずなのだが……」
聞こえるか聞こえないかの小さくため息をつくと、薄暗い部屋を見回す。顔を強張らせているもの、悲壮感に涙を流しているもの、さまざまな表情があった。
「事ここに到り、事態収拾の手段として無条件降伏以外にないというのは中央でも一致した意見となっている。国体護持の妥協、軍の解体もやむを得ず、とようやく覚悟を決めたわけだ」
一瞬のうちに、驚愕の念が隊員たちを覆った。

「だが、無条件降伏ということは、米軍がいかなる傍若無人の振る舞いをしようが、それを止めうるものはいない。先ほど斉藤少尉らが言っていたように、やつらは日本という存在を抹消しようと画策するかもしれぬ。それを止めるものは何か、『強行すれば相応の犠牲を払わせる』という国民の覚悟ではないか。その覚悟の表現の

一つが特攻である、と私は考えている。一億玉砕ではなく、一億国民の未来への先駆けとして、諸君らには出撃してもらいたい」

周囲は寂として物音ひとつしない。宇垣の弁舌に納得した者はいなかった。反論、罵倒、葛藤、山ほどある複雑すぎる心情を心の中に無理やり押し込み、それを敵艦にぶつけようと必死に押さえ込んでいた。

誰かが音頭を取り、部屋が再び騒がしい酒宴の場と化すまで時間が必要だった。

高原と斉藤は再び満天の星空の下にいた。雲ひとつない空に雨の予感はまったくない。彼らの少なくとも一方は、星の下で酒豪を発揮することも、灼熱の太陽の木陰で昼寝することもないだろう。

「高原、さっきの長官の言葉……どう思った？お前の意見を聞いてみたい」

高原はためらいの色もなく言った。

「中将も結局は軍人だ。俺と意見が違って当然だ。そして、おそらく中将は正しい」

だが、組織として正しいことは往々にして個人のささやかな幸福を奪うのだ。と、口に出すことはなかった。

そして、最期の刻が近づく。

五章　衝突（後書き）

まず、更新が遅れたことをお詫びします。
この章は私がもっとも述べたいことを詰めこむはずだった箇所です。そのため大いに悩み、結局あまり表現できませんでした。作者の未熟で高原くんや宇垣中将にはたいへん迷惑をかけてしまいました。
なお、繰り返しますがこの小説は事実をもとにしたフィクションであり、大西瀧次郎が酒好きで特攻隊員に酒を贈っていたたというのは創作です。
※補足　作中に登場した新京は満州帝国の首都であった都市で、現在の吉林省の省都の長春です。

六章　出撃

暗闇のなか、鹿屋飛行場にエンジン音が響きわたる。もちろん鹿屋は南九州の中心的な航空基地であるから、夜のうちに米機動部隊の所在をもとめて偵察機が発進したり重要な指令文書や新人の搭乗員を抱えた連絡機がすべり込んでくることは毎日のようにあり、ときおり敵を奇襲的に黎明攻撃するため少数機の編隊が飛び立つこともある。だが、この耳をつんざくような爆音は十機どころの数ではない。

現在、腹の下に大型爆弾を抱え、待機所の前で機首を並べて出撃の時を今やおそしと待ちかまえているのは、零戦をはじめ彗星、天山、一式陸攻、銀河、九九艦爆、九七艦攻など多彩にわたる。それに加え護衛用の零戦と戦果確認機、戦前に製造された旧式機までかき集めた寄せ集めとはいえ、約３００機もの大軍が鹿屋でエンジン音をうならせるのは沖縄陥落以来久方ぶりのことであり、そしておそらくこれが最後だろう。

昨夜、宇垣中将は「中央はおそらく一ヶ月以内に決断を下すだろう」と言っていた。無論ポツダム宣言に関する件である。そうなると本土決戦構想である決号作戦はおそらく不発に終わる。いくら飛行機をとっておいてもどうせ米軍にスクラップにされる、それぐらいなら動かせる機をかき集めて集中的に最後の反撃を行おう。要するにこういうことだろう。軍略としてはそれでいい。だが、「廃物利用」のためにあたら命を落とす搭乗員の心情はいかなるものか、東京の赤煉瓦の中で机に向かって書類を決裁しているエリート軍人は理解しているのだろうか。

「斉藤！」

斉藤は飛行服姿で乗機の点検をしていた。日本海軍の整備員は開戦前から現在に至るまで優秀だが、それでも自分の命を預ける愛機の状態はできうる限り自分の目で確認しておきたいというのが搭乗

員の気持ちである。
その斉藤に駆け寄ってきたのは、同じく飛行服を身に纏い、出撃命令を待ち構えていたはずの高原だった。
「どうした？」
「ひとつ頼みがある」
そういって高原は手に持っていた封筒を差し出した。飾り気のない白い封筒の宛名書きには、高原の筆跡で「椎名　沙織様」と書かれている。
「松山の俺の家の隣に住んでいるんだが、戦争がひと段落したらこれを彼女に届けてほしい」
生き残って届けろ、そういうことか。高原らしいと、斉藤は心の中で笑った。彼に断る理由などない。快諾の返答を得た高原は安堵の表情を浮かべると、何を思ったか手紙を受け取ろうとする手をかわし、驚く斉藤を後目に駆け出した。
「おい！何をする気だ！」
高原は斉藤の乗機によじ登ると、コクピットの中央に手紙を貼り付けたのだ。意図を察した斉藤は軽くため息をついた。
「……別にいいけどさ、俺が生き残っても機を放棄することだってあるんだぞ？」
七夕空襲のときのように飛行場に胴体着陸する可能性もあるし、帰投途中に被弾や燃料切れで落下傘降下を余儀なくされることも考えられた。また機に重大な損傷がなくとも、手紙自体が銃弾や破片に貫かれたり火災で燃えてしまうことも十分にありえる。危険を冒してまで大事な手紙を載せる必要はないはずなのだが。
「お前なら大丈夫だと思うからな。……それに、遺書なら別便で送ってある。こっちはおまけだ」
にやりと笑うと、高原は自機が横たわる待機所へと戻っていった。斉藤はそれを追おうとして踏み出し、思いとどまった。飛行帽を取って髪をかき回すと、なにやらぶつぶつぶやきながら機体の整備に戻った。

「発進用ー意！」

空がほのかに白み始め、いよいよ舞台が動き始めた。先行している「彩雲」偵察機によれば、目標の米機動部隊は東南東１２０海里まで接近しているという。おそらく基地航空隊に反撃する余力はないと見て、ぎりぎりまで近づいたのだろう。こちらとしては願ってもない展開だ。

本来なら航空機の対艦攻撃には、空からは艦隊が発見しやすく地上からは飛行機が見えにくい黎明に攻撃するのが常道であるが、今回はそれを選択せず、あえて明るくなってからの出撃を採用した。理由は単純、夜間の編隊飛行などおぼつかないほど搭乗員の錬度が低かったためである。かつて第一機動部隊の空母搭乗員は全員夜間雷爆撃の技量の持ち主であったというが、いまやその面影はごく一部の熟練搭乗員にしか見えない。さらに目標までの距離が遠ければ編隊を維持することができず離散してしまう危険性もあったが、幸運にも敵のほうから歩み寄ってきてくれたため、指揮官の心労はわずかながら解消された。

少しでも足をそろえるため、速度の遅い旧式機が最初に滑走路を蹴って黎明の大空へと駆け出していく。続いて彗星、天山、銀河といった比較的足のはやい攻撃機や爆撃機が飛び出す。そして最後に零戦の出番である。

まずは腹の下に爆弾を抱えた攻撃隊に属する零戦が動き出す。先頭は零戦攻撃隊を率いる高原中尉である。風防を開け放ち、居並び「帽振れ」で見送る整備員たちに向けて敬礼を施すと、やや重たげながらもふわりと機体を浮かし、虚空へと上昇していく。続いて続々と滑走を始め、さらに篠原中尉が率いる直衛隊が続く。中にはよろけて周囲をひやりとさせた機もあったが全員が無事に空へと上がった。

そして殿は斉藤である。機種は最新式の局地戦闘機、紫電二一型、通称紫電改。日本機ならではの空戦性能と２０ミリ機関砲四門という重武装、各種の新機構によって日本上空に跋扈する米機を圧倒している日本海軍最後の新鋭機である。

「チョークはずせ！」

斉藤の怒号とともに整備員によって紫電改の動きを止めていた車輪止めがはずされ、少しずつ前へと進み出す。

「斉藤少尉、必ず帰ってきてくださいよ！」

「あたりまえだ、簡単にくたばってたまるか！」

最後まで翼上に残っていた整備員たちの激励を受け、彼らが飛び降りていくのを待ってスロットルを押し込む。零戦の実に二倍の馬力を誇る「誉」エンジンがその二千馬力を限界まで発揮し、重厚な轟音とともに機体を前へと押し出していく。

目の前には白い封筒がある。最初、彼は手紙を地上に残しておこうと思っていた。整備員に託しておけば高原に止めることはできない。だが、やめた。根拠はないが、なんとなく高原の遺志を冒涜しているような気がしたからだ。もちろん何に代えても守るつもりだが、万一のことがあればそのときはあきらめるしかない。高原も、そのことはわかっているだろう。

やがて機が速度に乗り、尻が浮き上がる感覚が伝わってくる。そしておもむろに操縦桿を引き、ふわりと浮いた感触とともに車輪が地上から離れた。

最後に地上に一瞥をくれ、風防を閉めるとそこは孤独の空間。帰ってくるまでは一人きりだ。きらめく陽光を浴びながら、斉藤は自然と高まってくる武人としての高揚感に身震いし、改めて操縦桿を握りしめた。

六章　出撃（後書き）

予定では次の章とセットになるはずだったのですが、どうもまとまりがつかなさそうだったので分けて公開となりました。当初の四部構成構想はどこへ行った……

さて、いよいよ出撃となった特攻隊、次回には突入の予定です。全体としてもあと3章ほどで完結の予定です。どうか気長にお待ちください。

七章　血と炎の空中戦～志布志沖海戦・前編～

攻撃部隊が鹿屋基地を出撃して一時間ほど経った。すでに日は中天高く昇り、低空を進む無数の深緑の翼が陽光と海からの照り返しを受けてきらめいている。幸運なことに雲は少なく、まず快晴といえる天候であったため陣形は大きく崩れることもなく進撃を続けている。それでも周りを見渡して雑然とした感がぬぐえないのは、やはり速度も運動性能も違う多数の航空機の集団であるからだろう。

「さて、彩雲の情報が正しければそろそろ見えるはずだが……」

コクピットの中で高原がつぶやく。周りを見回してもそれらしい影はなく、ほかの機が見つけた様子もない。

部隊はまっすぐ敵に向かわず一度東の北よりに進み、４０分ほど飛んでから南に変針した。あえて手間をかけたのは、そのまま東南東に進むと朝日に向かって飛ぶことになり、会敵位置によっては敵の迎撃戦闘機が太陽を味方につけてしまう恐れがあったからだ。

それでも敵が予想外に近かったこともあって満載の燃料にはまだ余裕があるが、時間をかけると錬度の低い編隊が崩れる危険性があり、それ以上に長時間緊張を持続させることは精神衛生上よろしくない。さっさとすましてしまいたい、というのが正直なところである。

とりあえず、諸々の心配はどうやら杞憂に終わりそうだった。先頭を飛んでいた直衛隊の零戦が激しく主翼を振っている。バンクというこの行動は何か異変が起きたことを示しており、周囲の機が連鎖的にバンクを振りはじめ、そして高原も見つけた。

右舷前方はるか遠くに、胡麻粒のような機影が望見できる。その影は近づくにつれ数を増し、五十近くまで拡大した。哨戒の戦闘機がいるということはすなわち近くに機動部隊がいることを意味する。高原は自身もバンクを振ると、操縦桿を引いた。

操縦席の後ろから酸素マスクを取り出し、装着してスイッチを入

れる。新鮮な酸素が肺に流れ込む。その冷気が自分の体内の熱さを感じとらせ、高原を苦笑させた。どうもみな勘違いしているようだが、「鉄仮面」高原と言えど、戦闘のときは当然緊張もすれば興奮もする。文字通り仮面をかぶって覆い隠しているだけなのだ。

最初に勇躍して動き出したのは熟練のパイロットたちで、新人の搭乗員たちは彼らが突如動き始めたのを見てあわてて追従した。直衛隊八十機は二隊に別れた。五十機は篠原中尉が直率してまだ見ぬ敵機動部隊を目指し翔ける本隊の護衛を続け、中澤少尉率いる三十機が来襲する敵戦闘機群と相対した。

敵はアメリカの主力艦載戦闘機、魔女ことＦ６Ｆグラマン・ヘルキャット。数は約六十機、中澤隊の実に二倍を数える。だが、ここで敵を食い止めなければ本隊の後方から追いすがられ、前方に待ち構えているであろう機動部隊の直衛隊と挟撃されてしまう。必死の覚悟とともに、巧みな機動によって太陽を背にすることに成功した彼らは、満を持して戦闘に入った。

その間に本隊は高度を三千まで上げ、艦隊の捜索を続ける。それほど遠くにはいないはず。その推測は見事に当たり、彗星の一機がバンクを振って発見を伝える。前方の海面に長大なウェーキと……上空に無数の胡麻粒も発見した。

「空母が４……大型と小型が２隻ずつか……それに戦艦か？戦艦が２……重巡が６……あの２隻やけに大きいな……超甲巡級の大型重巡ってあれのことか？……それに軽巡と駆逐艦が２０から３０……か。相変わらず堅い輪形陣だ」

高原がその戦力を冷静に分析している間にも、ウェーキの群れは近づいてくる。そして胡麻粒の群れも急接近してくる。高原攻撃隊らが緩降下に入ると同時に篠原戦闘機隊は旋回、上昇し、艦隊の直上を守る敵戦闘機群に向かう。こちらも二倍近い数の差で、中澤隊と違い無力な本隊を抱えているため圧倒的に不利である。それでも彼らはひるむことなく、雄叫びの代わりにエンジン音をとどろかせ

ながら真っ向から組み合った。
たちまち空戦域は炎と煙の狂騒に包まれた。さながら優雅にして苛烈な剣舞のようだ。敵の足並みが乱れたためか零戦得意のドッグ・ファイト持ち込むことに成功し、煙を引いている機はわずかにＦ６Ｆのほうが多い。とはいえ、量的劣勢は簡単には補えない。
血みどろの空戦域の上を、本隊は篠原隊の十機に護衛されながら強引に突破する。足の遅い旧式機はＦ６Ｆに喰い付かれ、次々と煙を引いて落ちていく。だが、高原らに彼らを救うすべはない。ここは彼らが時間を稼いでいる間に数センチでも機動部隊に近づくべきなのだ。
突如左翼の天山隊が崩れた。雲の中から３０機ほどの魔女が現れたのだ。あっという間に２機の天山が落ちていく。本隊に張り付いていた加藤飛曹長率いる零戦隊が熊に立ち向かう猟犬よろしく雄々しく食らいつく。だが、数はわずかに９機、あまりに数が少なすぎた。１０機ほどが加藤隊の必死の防戦をすり抜け、高原隊めがけて突っかかって来た。
軽快さで鳴らす零戦とはいえ腹に７５０キロもの荷物を抱えていては回避のしようもない。たちまち避けそこねた機が燃料タンクを貫通されて爆発し、あるいはパイロットごとコクピットを粉砕され操縦者を失って降下する。
さらに一機が射線に捉えられ、撃墜されそうになったまさにそのとき。
「なに！？」
そんな声が聞こえそうな挙動で、零戦を狙っていたＦ６Ｆはあわてて逃げ出す。無抵抗の兎を狩るように鈍重な攻撃機を追い回すのに夢中になっていた彼は、高原の操る零戦が無言のうちに後背に迫っていることに気がつかなかったのだ。
高原にとって、恥も外聞もなく回避行動をとるＦ６Ｆに機銃弾を撃ちこむ機会は十分にあったはずだ。だが、彼は撃たなかった。正確には、撃てなかった。

「くそ……機銃の一門でもあれば逃がしはしないものを」
そう、高原機には機銃が搭載されていないのだ。
攻撃機は少しでも身を軽くして動きやすいように、また物資節約のためでもあるのだろうが、不要なもの一切を取り払っている。機銃や機関砲はもちろん、無線装置、意外にかさばる照準機、さらには操縦士を守る装甲板も撤去され、対戦闘機戦闘に対しては完全に無防備である。
要は高原ははったりをかまして首尾よく敵を追い払ったわけであるのだが、いわばこれは手品のようなものであり、手品は種がばれた瞬間から手品たりえない。
それでも高原はよく戦い、逃げた。零戦の能力を限界まで駆使して魔女たちを翻弄した。一度など機をわざと失速させて機銃の射程をはずすという芸当まで見せた。
零戦はよく村正の名刀にたとえられる。名人にその操縦桿を握られたとき、その力は想像を絶する。高原はまさしく名刀の柄を握った達人だった。
高原にとって不運だったのは、敵の指揮官がたった一機の零戦に翻弄されていることに業をにやし、部隊の総力を挙げて高原機を追いまわしにかかったことだった。高原ほどの技量の持ち主であれば二機や三機程度なら後れをとることはなかったし、腹に爆弾を抱えていなければたとえ数十機の敵機に攻撃されても切り抜けていただろう。性悪な黄泉の主はどうあっても高原に敵艦へたどりつかせたくないようだった。
じつに十数機もの魔女たちにに完全に包囲され、高原は覚悟を決めた。
少なくとも高原の奮戦は相応に報われたはずだ。斜め下に見える攻撃隊、高原がいなければ十分の一以下に数を減らしていただろう。そのことを慰めに、強引に感情を納得させた。いまさらじたばたしても仕方がないのだと。
そして、せめて翼に一機引っかけて道連れにしてやろうと操縦桿

を握りしめたとき。
左から突進してきた魔女の主翼が突如火を吹いた。もちろん勝手に燃え出すはずがない。あわてて周囲を見渡すと、上空からさらにもう一機に銃撃を加えつつ急降下する機が見えた。翼に大きく描かれた赤い丸、零戦より大型の心持ち丸みを帯びた濃緑の機体。紫電改だ。
「斉藤！あの馬鹿！」
口が斉藤を罵倒している間にも、体は無意識のうちに動いていた。斉藤機の乱入によって空いた包囲網の穴に自機を突っ込ませる。追おうとして不用意に突出した一機が斉藤機に機関砲弾を叩き込まれて爆発した。
特攻機に施された軽量化改造は戦果確認機にも同様に実施されている。特攻機と違い生存することが前提のため装甲板こそはずされていないが、武装など搭載していないはずである。
「あの野郎……どんな手使って整備長を脅した？」
高原が見たものが魔法や恐怖のあまりの幻覚でなければ、斉藤の紫電改には少なくとも2門の20ミリ機関砲がついている。命令違反であることは明らかだが、密かに機銃を搭載するなど一人でできる芸当ではない。説得したのか脅迫したのか、とにかく整備員の協力を得たはずだ。
ちなみにこの改造は、斉藤の懇請を受けた酒井司令が整備長に命じ半ば公然と行われていたのだが、高原は知るよしもない。
斉藤機を討ち取るべく魔女たちが殺到する。一息に葬ろうと多方面から同時に攻撃をかけてきた。彼らの脳裏には周囲から無数の銃弾を受けて鹿児島沖に墜落していく斉藤機が写っていた。だが、直後の斉藤の動きは二重の意味で彼らの予想を裏切った。
斉藤機が消えた。どこに行ったのか、気づいたときはすでに遅かった。無線を通じ僚友が警告をがなりたてるなか、コクピットごと体を粉砕される。20ミリ機関砲にはそれほどの威力があった。
戦友がやられたことに憤激した米軍パイロットは各個に斉藤機に

襲いかかった。だが、斉藤は動じない。向かい来る銃弾をかわし、頃合いを見計らっては火線を叩き込む。神業にも等しい斉藤の奮戦は、彼の技量だけによるものではない。二千馬力級エンジンを搭載した大型機にもかかわらず、紫電改は零戦並みの旋回性能を見せていた。

特殊機構その一、自動空戦フラップ。

本来離着陸用に揚力を調整するためのフラップを空戦中に手動で操作し、旋回性能を上昇させるという試みは一部の熟練搭乗員で行われていたが、これを自動で調整できるようにしたものが自動空戦フラップである。水銀とピトー管を利用し、速度と旋回Gを計測してフラップを自動調整するという、単純だが画期的な装置である。現在、世界でこれを装備しているのは、紫電シリーズとその前身である「強風」水上戦闘機を除けば開発中の烈風艦戦だけである。

気がつくと、周囲の敵機は消えていた。右主翼の向こうに斉藤機が並び、誇らしげにバンクを振っている。まるで尻尾を振る犬のようだ、と高原は思い、酸素マスクの中でわずかにわらった。もっとも、斉藤への手信号は温和さとは無縁だった。

『馬鹿野郎！任務があるだろう、さっさと退がれ！』

『おや？せっかく危機を救ってやったんだ、礼の一つぐらい言ったってばちは当たらんと思うぞ？』

『はっ、命令違反者につくす礼なんぞない！』

手信号はそこまで複雑なものではなく、同時に複雑な意思伝達もできないはずなのだが、二人の会話はその範囲を超えている。さすがに一年間扶け扶けられてすごした戦友、以心伝心の仲とは彼らのことをさすのだろう。

『他人の戦いに首を突っ込むのは勝手だが、深入りして首をかかれるなよ』

『あたりまえだ！あんな連中にやられる俺と思ってか！』

『敵さんも同じように思ってるだろうさ』

二人は風防ごしに顔をみあわせ、にやりと笑った。今度こそ、最期だ。未練がないと言えば嘘になる。だが、互いに相手の負担になるような別れ方はしたくなかった。

斉藤機はバンクを振ると旋回しつつ高度をとり、後方へと去っていく。そして、高原の目の前には、無窮の海原と鉄壁の艦隊が広がっていた。

八章　鉄壁の艦隊～志布志沖海戦・中編～

執拗に追っていた数機のＦ６Ｆが翼をひらめかせて去っていく。同時に、腹に響くような音とともに巡洋艦から火が噴き上がった。散開して急降下をかける攻撃隊の周囲に黒い華が咲き乱れ、彼らを盛大に歓迎する狂宴が始まった。

その猛烈な砲火はあたかも火の壁を思わせた。日本軍のそれとは密度がまったく違う。火力の絶対量からして桁違いということもあるが、それ以上に砲弾そのものにも仕掛けがあった。

日本軍の高角砲弾は発射してからあらかじめ設定しておいた時間で爆発するという時限爆発方式である。それに対して米軍のそれは砲弾の先端にレーダーが埋め込まれており、航空機が一定の距離に近づくと自動的に作動する「ＶＴ信管」と呼ばれるものが搭載されている。

いちいち距離まで考えて信管を調整しなければならない日本軍の対空砲と違い、とりあえず敵機のいる方向に打ち込めば高確率で被弾させることができるのだ。飛行機の周囲に炎の壁を作り出す、日本航空隊にとっては悪魔のような存在だった。

その「ファイア・フォール（火の滝）」めがけて、攻撃隊は恐れることなく果敢に突入した。

出撃当初は１５０機を数えた攻撃隊は機体不調による帰還が続出し、敵戦闘機に阻まれたものも含め三分の一が戦場に到達できなかった。

それでも残存機は１００機を数え、仮に九割が対空砲に撃墜されたとしても１０機は突入できる計算になる。あとは運さえ味方すれば４隻の空母のうち半数は撃破できるだろう。その楽観的ともいえる予測を胸に、隊員らは米艦隊に迫る。

激しい砲火の前に味方機は相次いで落ちていく。

零戦が右主翼の三分の二を粉砕されて墜落し、彗星艦爆がエンジン部に無数の破片を浴びて爆発した。
左エンジンをもぎ取られ、炎上しながらも駆逐艦に突入しようとした銀河が寸前にコクピットを粉砕され、空しく海面に水柱を上げる。海面は硝煙の黒に、上空は炎と血の紅に彩られた。
阿鼻叫喚の戦場を、高原は数機の零戦を従えてくぐり抜けていく。彼らの狙いは空母ではない。無数の戦艦、巡洋艦、駆逐艦の高角砲に周囲を固められた空母を攻撃することは容易ではない。高原らは安易に大物を狙って全てを失う愚を犯さなかった。
「いくぞ！」
高原が指し示したのは、６隻の重巡洋艦の中でもひときわ大きい艦。アメリカではアラスカ級と呼ばれる大型重巡だった。あれを撃破し、対空砲の射撃をとめることができれば、後続機の突入はさらに容易になるはずである。
煙を吸って喘ぎぎみのエンジンに鞭打って降下する高原隊に、次第に射撃が集中しはじめる。最後尾を固める零戦が直撃を受けて四散した。
高原機の周囲で爆発が連鎖し、雷鳴のような音とともに風防が激しく震える。未熟な搭乗員なら発狂してもおかしくないほどである。しかし、米機動部隊の乗組員にとっては残念なことに、高原は歴戦の勇者と呼ばれるに足るだけの胆力を持った男だった。
大きく旋回を繰り返し、執拗に狙う射線をかわす。
左主翼の翼端が吹き飛ばされ、翼下の燃料タンクから燃料が白い糸のように漏れ出した。風防には無数のひびが入り、計測器のいくつかは破片に貫かれてお釈迦になっている。
自身も額から血を流しながら、高原は巡洋戦艦から目を離さない。その姿は、戦死した搭乗員の霊が乗り移ったかのようだった。
猛烈な火線をかいくぐり、視界を遮るほどの黒煙を機体で引きちぎりながら、巡洋戦艦に迫る。機銃座に取り付く米兵のおびえに満ちたひげ面まで見て取れるまで接近した。そして。

この距離まで近づけば狙って当たりはしない。おそらく偶然に、巡洋戦艦が必死に放った４０ミリ機銃弾が左主翼の中央を直撃した。
次の瞬間に主翼は根元から奪われ、同時にその衝撃が無理な機動と高角砲の爆圧で痛めつけられた零戦の機体を分解した。高原は撃墜されたことを知る暇もなかったに違いない。
炎に包まれたコクピットの中で、彼は最期に何を考えたのだろうか。
「沙織！」
キャノピーに貼った彼女の写真が燃え落ちるのをみながら、高原は意識を手放した。

巡洋戦艦のすぐ横に高々と上がった水柱の墓標を、斉藤は血涙を流さんばかりの形相で見つめている。
これが斉藤の任務だった。戦友の戦いぶりを冷徹に観察し、その結果を正確に報告するという。彼は攻撃隊員二百余名の死を見届けなければならない。残酷だが、高原一人にかかずらっている余裕はなかった。
高原の戦死はまったく無駄にはならなかった。いつの間にか巡洋艦が引いていた長大なウェーキが消え、速度が落ちている。高原機が抱えていた爆弾が水中で爆発し、艦の推進機関を損傷させたのだろう。通常攻撃でも、舷側に落ちた爆弾が命中弾よりも多大な損害を与えることはよくある。
舵を失い対空砲の射撃が揺らぐ、その機を逃さず高原の僚機２機が巡洋戦艦に突入した。一機は煙突に、一機は第二砲塔と艦橋の間の高角砲塔に命中。
その直後に第二砲塔が誘幕を起こし、艦が大きく傾く。また艦が吐き出す大量の黒煙が巡洋戦艦の近くを航行していた駆逐艦３隻の視界を奪い、砲撃不能に追い込んだ。

高原らの攻撃は予想以上に大きな成果を上げた。この機を逃す彼らではない。こじ開けられた弾幕の穴に、残っていた３０機が殺到する。

機動部隊も穴を補うべく、必死に弾幕を張る。一機、また一機と炎に巻かれ海面に叩きつけられるなか、残存機は確実に空母へ迫る。

日本機が空母にたどりつけるか、その前に米艦隊が全てを叩き落せるか。数分間の激しい攻防戦は、はわずかながら日本軍に分があった。

煙を引きながら一機の銀河が中型空母の飛行甲板に突入した。轟音とともに天にも届くかというばかりの炎の渦が吹き上がり、飛行甲板に並べられた戦闘機を吹き飛ばした。

数拍おいて零戦が左舷の艦腹に飛び込み、爆風は格納庫を席巻した。さらにその爆圧は艦全体に損傷を及ぼし、各所で火災を発生させ、艦体を歪ませて海水が怒涛のごとく流れ込んだ。

そして、最後に残った天山が大破した空母の前方を進む大型空母を狙い、４０ミリ機関砲にコクピットを粉々にされ操縦士は即死したにもかかわらず、その機自体に意思があるかのように軌道を揺らがせることなく飛行甲板後部に突入した。

その爆発音を最後に、洋上に静寂が戻った。青い空には、戦死した特攻隊員や米乗組員らを弔うかのように、数条の煙の墓標が立ちのぼっていた。

八章　鉄壁の艦隊～志布志沖海戦・中編～（後書き）

予告

間もなく完結するであろう護国ですが、１２月の中旬ごろには終章を掲載する予定です。しばらくお待ちください。

こう宣言しておけば私もサボれまい。これぞ背水の陣！フフフ……

（真綿で首を絞めるとも言う）

九章　背走～志布志沖海戦・後編～

今さら涙など流さなかった。

斉藤の感情が麻痺したのではない。だが、戦死した隊員たちの親兄弟、妻子や恋人たちの悲嘆の念を思えば、自らの心痛などいかほどのものがあろうか。

永遠に帰らぬ者の帰りを待つ人々に、せめて最期の様子を知らせたい。曖昧な推測などではなく、自分の目で確認した、生きた情報を。

たったそれだけ。その想いだけが、今にも決壊しそうな心の堤防を支えていたのだ。

攻撃隊に続いて、零戦隊にも終わりが訪れようとしていた。

烈火のごとき魔女の襲撃を攻撃終了まで見事に支えきった彼らだが、その代償は大きかった。

後ろに鈍重な攻撃機をかばっての空中戦はかなり難しい。目の前の敵を何十機と落としても、攻撃機が撃墜されてしまっては意味がないからだ。自然、味方機は分散を余儀なくされ、ただでさえ開いている戦力差がさらに広がってしまう。

しかも、百機を数えた直衛隊の搭乗員はその八割がたは熟練未満で、そのうち約半数は今日初めて実戦のための飛行を体験したのだ。

篠原中尉の視界にいる零戦は、自機も含めわずかに６機。離れた箇所で孤軍奮闘するものも数名いるが、戦術集団としては全滅と言っていい。逆に言えば、この時点で生き残っている搭乗員はそれだけで自らの技量の証明になるだろう。

自身も十数分の空戦で燃料の八分の一と弾薬の半分を消費し、敵の銃弾を主翼と胴体に一発ずつ受けている。意外に損害が少ないの

は、篠原自身の技量と、後方をつかず離れず守っていた樋口二飛曹の援護が巧妙だったためだ。

今しがた機動部隊上空を離れ、横に並んだ斉藤に、篠原は手信号を使って問いかけた。

『斉藤少尉！　無事か？』

『は、なんとか』

いまだ傷のない、流麗な紫電改の機体を横目で見て、篠原は軽く笑った。

『それは重畳。よし、このまま敵中を突っ切るぞ。１１時方向に緩降下しつつ全速力で突撃。いいな！』

『了解。援護頼みます』

斉藤は軽く頷くと、ずいと前に出る。それを確認し、篠原もスロットルを押し込んだ。わずかに遅れて樋口機も続く。そのさらに後方から、２機の零戦が背後を護るように追従した。

四方から火線が集中し始めた。散開していた魔女たちが、篠原隊めがけて殺到し、周辺空域の密度は一気に上がる。

一方向を向いた集団行動、それは脱出作戦以外の何者でもない。米軍も、戦力を総動員してこれを叩きにかかっている。ジャップによって殺された僚友の仇を一人たりとも逃しはしない。米軍もまた、必死だった。

高密度の空間を火線が交錯し、ときおり緋色の触手のように機体に絡み付いては海面へ叩きつける。濃緑とネイビー・ブルーの塗料で縁取られていた青い空が煙の黒と炎の赤で彩られ、極彩色の地獄絵図へと塗り替えていく。

周辺で孤軍奮闘していた零戦も、斉藤らの脱出援護のため篠原隊

に殺到する魔女の後背を撃ち、さらにその零戦と死闘を繰り広げていた米機が彼らを追って戦域になだれ込むにいたり、いささか奇怪な現象が起きた。
進みつつ暴れまわる篠原隊と彼らを包囲しつつ圧殺しようとする米軍戦闘機隊、その外周部に喰らいつく零戦、その零戦の後背から押し込めて殲滅しようとする魔女たち。
限定された空域の中でそれぞれの思惑が衝突し、絡み合い、渾然一体となって濃縮され、濃縮されすぎて、彼らの意図せぬ混乱を引き起こした。あまりの過密状態のために、なんと空中で交通渋滞が発生してしまったのだ。

時速４００キロ以上で飛行する航空機が一点めがけて殺到すればどうなるか。
いちいち停止できる自動車とは次元が違うのだ。車ならクラクションを鳴らして不平不満を並べ立て、渋滞が解消するのを待てばいいが、戦闘機ではそんな悠長なことは言っていられない。接近すれば僚機を回避するのが一秒遅れれば、その分天国の門が近づくのである。
悲鳴を含んだ無線通信が空中を埋め尽くす。必死の回避も空しく、友軍機との接吻を強要され墜落していく者が続出した。
もはや零戦を追い回すどころではない。とりあえず味方から逃げるので精一杯だ。
だが、数の多さがあだになった。数十機なら一気に散開もできようが、百機単位の大群の中では動けば動くほど混乱が伝播していく。そこに内部の敵機が暴れ、混乱を最大限に拡大していくのだ。
日ごろ無線による統制に慣れていた米軍パイロットの、パニックに対する弱さは想像以上だった。こと実戦に慣れていない新兵はむやみやたらと旋回を繰り返し、時には味方に機銃を浴びせる者までいる始末だ。
混乱を引き起こした責任者である指揮官は、自身もパニックに陥

りながらもこの狂乱状態を収めるため必死に味方を誘導し、絡まった糸をほぐしていく。1秒ごとに敵を全滅させる可能性は減り、一分ごとに味方の理不尽な被害は増えていった。

篠原にしてみれば天与の機会である。
特に意図したわけでもなく、敵が勝手に狂乱してくれているのだ。敵の指揮官の無能さに、今はむしろ感謝のしきりである。
これを活かさねば、篠原としては戦死した僚友たちに顔向けができない。この際、時間は白金よりも貴重だ。篠原は、前方で敵弾と敵機とを避けつつ進んでいる斉藤機に合図を送った。
『少尉！　今のうちだ、先に行け！』
斉藤は、わずかな間だが、返答を返さなかった。篠原らをおいて先に行くことが何を意味するか、わからぬ彼ではない。
『どうした？　くちばしの黄色いひよっこにはまだお守りが必要か？』
からかう表情の中に、ためらう斉藤の背中を押す温かい気遣いを感じ取り、彼は心中の葛藤を押し殺した。
『……いえ、ご心配なく。では、ご武運を』
『少尉もな』
2人は敬礼を交わすと、ともに視線を外した。とりあえず、彼らに感傷に浸る暇はない。
加速した紫電改が篠原機のもとを離れると、今度は後ろの樋口二飛曹機に向かって手を動かした。
『樋口、貴様も行け。斉藤機の援護だ』
『し、しかし！』
樋口が驚くのも無理はない。樋口は、初陣以来今日まで篠原とともに戦場を飛び回った仲であり、篠原が死ぬというのなら、靖国まで供をするのが当然と、彼は思っていた。
『早く行け！　命令だ！』

篠原も、その気持ちは知っている。だからこそ、樋山を死なせるわけにはいかない。１７歳にもならぬ少年を道連れにしては、靖国に行くにも気がとがめるというものである。
樋口の唇が真一文字に引きつっているのが、風防越しに見て取れた。わずかののち、迷いを断ち切るかのように硬い表情のまま敬礼する。そして蒼白な顔を前に向けると、樋口機は速度を上げた。

斉藤と樋口の戦域離脱を確認すると、篠原はおもむろに敵と向かい合った。
すでに他の零戦はいない。目の前にはようやく混乱を収束させた。ウンカのごとき魔女。数だけでいえばこちらのおよそ１５０倍。
「……上等だ」
零戦乗りとしては最高の舞台だ。せいぜい華麗に舞って、靖国までの旅程をにぎやかにしてやろうじゃあないか。
篠原は軽く笑った。透明な、綺麗な笑顔だった。

斉藤が振り返ったとき、戦場に残った最後の零戦が火を吹いた。
四方向から同時に射撃を受け、機体全体から黒い煙を曳きながら、ゆっくりと降下していく。直後、爆発とともに零戦の機体は空中に四散した。

斉藤は、わずかに瞑目した。
篠原中尉は、故郷の長野に若い細君と老いた両親、それに４人の弟と妹がいるという。
篠原には守るべき存在がいた。そして、彼は斉藤一人を守って死んだ。
それで納得できるのだろうか。斉藤にはわからない。守るべき人

を守れなかった、そう常に自責の念に駆られている、斉藤は理解できなかった。

わずかに生まれた心理的な間隙、その間を衝かれた。雲の合間に隠れるようにして、黒い影が忍び寄っていたのだ。

気づいた時には、ざっと8機の魔女が斉藤と樋口に向かって急降下していた。圧倒的多数、しかもグラマンの得意とする一撃離脱戦法の構えを半ば完成させている。おそらく団子状態の混戦に加わらず、ひと足先に待ち伏せていたに違いない。

「くそ！　どこにいた！？」

驚愕の念を頭の片隅に追いやり、機を旋回させて回避を試みる。その鼻先に火線が集中した。

斉藤も樋口も、戦場においては油断や驕慢などという言葉から遠い存在である。先ほどまでも決して周囲の警戒を怠っていたわけではない。

だが、主戦場を脱出したことの安心感、これまでに類を見ない激戦による疲労に加えて、親友や敬愛する上官の戦死を目の当たりにした心理的な衝撃が、彼らの鋭敏な感覚を無意識のうちに鈍化させ、それに敵指揮官の戦術構想が絶妙に融けこみ、絵に描いたような奇襲攻撃を完成させたのだ。

指揮官のみならず、部隊の兵卒も最精鋭らしい。今までとは比べものにならないほど、その射撃は精確だ。これまでわずかに数弾を受けたのみだった紫電改の機体に、次々と弾痕が穿たれていく。

エンジンのカバーを銃弾が貫き、華奢な「誉」エンジンを痛めつけていく。燃料パイプが破損したのか、一瞬紅い火が見えたが、すぐに鎮火した。

旋回によって身体にかかる強烈な圧力に耐えながら、強引に後背に回り込むと、弾倉に残っていた砲弾を全て吐き出す。めくらに撃った一連射は敵機を捉えることはなかったが、突然の射撃に驚いた魔女は樋口機への射線から退いた。

数十秒間の嵐が去ったのち、斉藤は左腕に鋭い痛みを覚え、顔をしかめた。敵弾の1発がコクピットに飛び込み、その破片が腕の肉を切り裂いていたのだ。

舌打ちして首もとのスカーフをほどいて腕に巻きつけながら、機体を見回す。

主翼や胴体には相当数の着弾が見られ、零戦であれば間違いなく骨格部が折れて空中分解していたところだ。そうでなくとも、エンジンの火災が広がっていればそのまま墜落していた。

これが収まったのは斉藤の卓越した操縦技術のなした技でもなければ、まして彼の日ごろの行いを神や仏が嘉したわけでもなく、紫電改に装備されたもう一つの新機構の成果である。

新機構、すなわち自動消火装置。エンジンや燃料タンクで出火すると、即座にその位置を探知、火が大きくなる前に炭酸ガスを吹き付けて鎮火してしまう、火災が致命的となる航空機としては垂涎ものの装置である。

もっとも、これはたった一回分しか搭載されていない。だが、その一回の火災がどれだけの熟練した搭乗員の命運を制したか。そして、その一回分がなければ、紫電改は炎にもまれて墜落する運命だったはずである。

離れた位置を飛んでいる樋口機は健在だった。ただし、エンジンに被弾したか、わずかに白煙を曳いている。エンジンが停止することはなさそうだが、全速の発揮は難しいと思われた。

逃げ切れるか、と自問したとき、樋口が突然バンクし、遠くから敬礼してきた。

一瞬の間をおいて、斉藤がその意味を理解したとき、すでに樋山機は機首をめぐらして7機の魔女に向かって飛び去っていく。
追跡する魔女を足止めし、斉藤機が確実に離脱できるまで時間を稼ごうとしているのだ。
その代わりに、樋口が生還する確率はぐっと低くなる。いや、ほぼ零に等しい。
「やめろ！　樋口二飛曹！　戻ってこい！」
届くはずもない怒号を上げ、樋口機を追おうと操縦桿を倒そうとした右手が、脳内の逡巡の色を映して硬直した。

激烈な葛藤が斉藤の心裡を駆け巡った。
何度繰り返しても足りないが、彼の任務は「戦果の確認及び報告」であり、それは無事に帰投してこそ果たされるものである。そんなことは高原らに念押しされるまでもなく、自身の理性が百も承知だが、彼の感情の一面はその遂行を激しく拒んでいた。
斉藤一人のために何人の卓越した零戦乗りが犠牲となったか。家族もいるだろう、恋人もいただろう彼らが守ったものは、ちっぽけな人間一人と活かされるはずもない一片の情報でしかないのか。
昨日までくだらない冗談を酒の肴に笑いあった仲間が、「自分のために」殺されていく。斉藤の、未だ無邪気さを残す精神を打ちのめすにたる光景だった。
斉藤機に銃弾は残っておらず、被弾さえしている。だが、紫電改の速力と機動性は健在だ。樋口を鹿屋基地に退避させ、自らも魔女の追撃を振り切ることは充分可能なはずだ。
確かに危険である。だが、損傷した零戦より、生存する確率は高いはずである。たとえ武運つたなく撃墜されたとしても、樋口は確実に救えるではないか……？

「くそ！」
迷いをまとめて両断するように、計器類に拳を叩きつけると、鈍い痛みを伝える手で操縦桿をぐっと握り締めた。

真夏の陽光が、スコップを持った兵士たちの肌を灼く。高々と沖する太陽は、まだ中天まで2時間ほどある。
滑走路に大穴をあけ、建物に爆弾を落とし、目に付いた人影に銃撃を加え、遮るものもいない鹿屋の上空を我が物顔で飛び回っていた招かれざる客は、30分ほど前にようやく自らの母艦へ帰っていった。
塹壕に飛び込んで暴風の通過を待っていた日本軍の兵士たちは、機影が東南の水平線へ去るのも待たず復旧作業を開始した。
炎上する建物や航空機の消火に当たるとともに、臨時の拠点としてテントや掘っ立て小屋を建て、折れた通信アンテナを張り直し、滑走路にあいた穴を埋める。さらなる襲撃に備えて高角砲や機銃に銃弾を補填し、爆風で吹き飛ばされた格納庫の擬装網をかけなおし、移動中に放置されていた航空機を林の中に隠す。そして、戦死した兵士の遺体、あるいは遺体の一部を回収し、埋葬する。
さっきまでともに笑っていた戦友「だったもの」を前に嗚咽するもの、また新兵の中にはちぎれ飛んだ腕や腹から飛び出た内臓を見て嘔吐するものも多い。

だが、真夏のこの時期に死体をそのまま放置しておくことはできない。腐食した肉体から発生する伝染病の威力は、われわれの想像を絶する。一週間後には、その猛毒は鹿屋基地全体を覆いつくすだろう。

神経をすり減らしながら、彼らは黙々と作業を続けた。

司令部の拠点は塹壕の中に設けられており、頑丈な造りのそこは爆弾が直撃しない限りはびくともしない。だが、中に籠っていては通信所や各施設と連絡がしづらいため、通常は地上に簡素な施設を建て、そこで指揮をとる。それも例に漏れず米軍の６０キロ爆弾に粉砕され、現在宇垣らは緊急に建てられたバラックに居を構えている。

そこに作業服姿の下士官が左手にスコップを抱えたまま飛び込み、椅子に座っている宇垣中将に敬礼した。

「長官！　戦闘機着陸用の滑走路の整地、完了しました！」

「ご苦労。引き続き滑走路の整備に当たってくれ」

「はっ！」

さすがに海軍最大の前線基地、これまで数十回にわたり空襲を経験してきただけに手際がいい。設営隊に加えて非番の整備員や搭乗員、周囲の警備を担当する陸戦隊も作業に加わり、飛行場の周辺は急速に数時間前の外観を取り戻していく。

いまだ落ち着かないのは、宇垣の視線の先で東南の空を見上げている酒井大佐の心中だった。

東南海域で放たれた「敵空母見ゆ」「全軍突撃せよ」の電文を、空襲下にある基地の通信機が傍受してから一時間半。それ以来、いまだ何の音信もない。

情報収集のため発進した二式艦偵は、米機動部隊が相当の被害を受けていることを報告している。攻撃が成功したのであれば、斉藤少尉や直衛隊もそろそろ還ってきてもいいころだ。だが、酒井の中には不安の雲が陽光を遮っている。

そのそわそわした姿に、宇垣が声をかけた。
「大佐、そう焦るな。貴官一人が先走ったところでどうにもなるまい」
真顔の宇垣にからかわれた酒井は、赤面しつつ椅子に腰をおろした。

酒井の心配は、宇垣にもわかる。
もともと酒井は、その雄偉な体格、平時の泰然自若とした態度からは想像もつかないほどの部下思いで知られる。最後の一機が着陸するまで滑走路脇を離れず見守り、誰が帰ってこないと聞けばところかまわず涙を流し、どこそこで救助されたと報告が入れば喜色を満面に浮かべて喜んだ。
航空戦に関しては、連合艦隊参謀長として陸海空戦線の作戦立案を担当した経験のある宇垣のほうが詳しいだろう。だが、悲報、凶報にも眉一つ動かさない冷徹さを見せる彼より、戦友の死に涙する酒井に兵がより親しみを感じるのは当然であるかもしれない。

「部下の身を案ずるのは悪いことではないが、容易に外に出すな。士気にかかわる」
「は……」
恐縮そうに頷く酒井に向けて、宇垣は鉄仮面を笑みの形にした。なぜか周囲からどよめきがおこる。
「部下を信頼せい。それが司令官の役目だ」
「はっ！」
今度は力をこめて大きく頷き、平生の余裕を取り戻した目で海図に視線を落とした。その元気な様子に軽く苦笑した宇垣は再び目をとじた。

その成果であろうか。直後、見張り員の声が周囲に響いた。

「東南方向に航空機1、向かってくる！」
「機種は！」
一瞬前までの態度をかなぐり捨てた酒井が、椅子から腰を浮かせながら怒号した。
「形式は単発小型、引込み脚！　詳細は確認中」
数百の視線が一斉に空に浮かぶ点に注がれる。
直衛隊の零戦か、あるいは斉藤の紫電改か。可能性は低いが、米軍機であった場合に備えて地上の高射砲と機銃が鎌首をもたげ、東南の空をにらむ。
飛行場の修復にあたっていた兵までもが作業を中断して見守る中、再び見張り員が声を張り上げた。
「確認！　機種は紫電二一型、斉藤少尉機です！」
その声が途切れるや否や、酒井は椅子を蹴り倒して飛行場へ走り出す。その後姿を見て苦笑した宇垣は悠然と立ち上がり、純白の第二種軍装を整え、歓声の中をゆっくりと歩き出した。

全身を押し包む倦怠感と鈍痛を追い出すように一つ深呼吸をすると、斉藤は手紙をつかみ、風防を思い切り蹴り上げた。被弾のためか、風防が歪み開かなかったのだ。
ガラスや樹脂が陽光にきらめく中を、斉藤は数時間ぶりの地上の空気を吸い込みながら滑走路に飛び降りた。
瞬間、硬直した脚がふらついたが、無様に転ぶことはこらえ、報告を待ちわびる酒井大佐らのもとへ駆け寄った。
「ご苦労！　報告を」

「はっ！」
斉藤は敬礼したまま一息に報告する。予想以上の内容に酒井が唸り声を上げ、それに幕僚の歓呼が続いた。
中型空母、巡洋戦艦各1隻大破、大型空母1隻が中破。いずれも戦闘航行は不能、沈没に至る可能性は少ないが、機動部隊が後退を余儀なくされるだろうことは確実。
昨年10月の初出撃以来、特攻隊最大の戦果である。数千機に及ぶ特攻機を送り出してきた鹿屋基地の隊員は、初めて溜飲を下げることができた。
「直衛隊は？　篠原中尉はどうした」
酒井の質問に、斉藤は唇の端をぐっと引き締め、絞るような声をだした。
「……篠原中尉は小官の脱出を援護し、壮烈なる戦死を遂げられました」
「……そうか」
他の者の生死は聞かなかった。あえて言わせずとも斉藤の目が語っていた。痛ましげに目を閉じ、開いたときにはすでに冷静さを取り戻した指揮官の目だった。

場所を指揮所に移して必要な情報を聞き出し、疲労の激しい斉藤に慰労の言葉をかけ休むよう命じ、酒井は事後処理のため指揮所に戻った。

巨大な戦果と全滅の被害とを書き込んだ、連合艦隊司令部への報告文を通信兵へ渡した酒井は、隅の椅子に座り空を見上げた。
「終わった……か」
誰にも聞かれずに溶け去るはずのその呟きは、別の男の声を伴って返ってきた。
「終わったな」

「は……」

万感の思いを封じ込め、見上げる酒井と宇垣の視線の先には、ただ青い大空が果てしなく広がっているのみだった。

十章　敗戦、そして

白い天井の下で斉藤が目を覚ましたとき、すでに暦は８月に移っていた。

７月２９日の海戦は「志布志沖海戦」と名付けられ、ただちに軍艦マーチに乗せてラジオ波に流された。

「戦果、空母中型二、戦艦一撃沈、空母大型一、駆逐艦二大破大炎上。損害、航空機６８機喪失……」

当事者から見れば呆れるような誇張された発表に、斉藤は最初こそ憤激したが、その熱はたちまちさめてしまった。大本営広報部の過大発表は今に始まったことではなかったし、そもそも程度の差こそあれ、戦況の誇張や隠匿などどこの軍でもやっていることだ。

実際は、出撃四百余人のうち基地に帰還したのは斉藤ただ一人。もう１名、不時着水した地点を偶然航行していた潜水艦に救助されたことが確認されたが、それだけだった。

３日、斉藤へ中尉への辞令が出されるとともに、戦力の大半を失った五〇三空に大分基地への転進が発令された。

いざ本土決戦の機運が高まる中、負傷の療養のため無為徒食の身に甘んじていた斉藤の目の前で、時は早く流れ去っていった。

６日、広島に新型爆弾投下。呉より連絡のため飛来した将校によれば、たった一発で広島の市街地は壊滅し、死者も十万はくだらないだろうと言う。

９日、満州、千島、南樺太にソ連軍侵攻。紙のように引き伸ばされていた防衛線は数十キロにわたって切り裂かれ、すでに前線との連絡もままならず。

同日、長崎に再び新型爆弾投下。

そして。

『朕思フニ、世界ノ大勢ト……』

性能の悪いラジオは雑音ばかりを拾い、やたらと難解な文語文とあいまって意味を取れたものは皆無だったが、ほとんどの隊員はその大意をつかんだようだった。

「負けたのか……？」

放送が終了したとたん、基地中が喧騒に包まれた。

放送のとおりであるとすれば、日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したことになる。

だが、無条件降伏とはあまりに非現実的であった。これは玉音ではなく、たとえばクーデターが発生し、東京を制圧した叛乱軍が流したものではないか。そのような疑惑が、彼らの胸中にわだかまった。

なにしろ九州は東京から遠く離れている。中央でなにかあったとしても、情勢などは一切わからない。

なにかあっていてくれ、降伏など嘘だ。むしろ希望的なその予測を否定する材料はなく、議論は永遠に続くかと思われた。

半ば放心しながらも、斉藤はこの放送を本物と信じている。

高原らの出撃前夜、宇垣中将は1ヶ月以内の降伏を予言していた。その予言は当然あてずっぽうなどではなく、中将の人脈を活かし、得た情報が根拠のはずである。
だとすれば、中央の降伏受諾派があえて叛乱を起こす必然性はない。玉音の真贋などは別として、降伏の情報は正しいだろうと、斉藤は見抜いていた。

「総員、傾注！」
突然、号令が響いた。
喧々諤々の議論を交わしていた将兵もたちまち統制を取り戻す。衝撃を受け失いかけた、軍人としての本能が蘇ったようだった。
「頭ぁ、中！　司令長官に対し、敬礼！」

一糸乱れぬ敬礼の前を宇垣中将は悠然と歩み、居並ぶ将兵を見渡すと、おもむろに口を開いた。
「先刻の玉音放送であるが、これは一部造反者の策謀などではない。昨１４日を持って、米英支ポツダム宣言受諾の詔勅発布せられたること、大本営及び海軍総隊司令部に確認済みである」

発せられた声は大きくはなかったが、その声は雷鳴よりも明瞭に基地将兵の心を撃った。

この瞬間、全ての希望は絶ち切られた。

「これに伴い、我々は帝国陸海軍最後の特攻に出撃する」
完全に静まり返った飛行場を、宇垣の声が再び響き渡る。

「指揮は私が自らとる。出撃者は有志、ただし妻帯者及び長男は

参加を禁ずる。希望者は1時間後に指揮所前に集合せよ。それ以外のものは先任者の指示に従い、武装解除を実施すべし」
周囲が思わずざわめく。それを視線の一なめで抑えると、宇垣は語をついだ。

「この際、軽挙妄動は禁物である。いやしくも帝海軍人ならば、陛下の御命に背くべからず。謹んで武装解除を実施、小官らをもって最後の戦死者とせよ。
連合軍がいかなる処置をとるとしても、日本から未来を奪い取ることはできない。
子孫にわれわれの精神を受け継がせよ。諸君らが海軍の伝統をけがす行動をとらぬことを願う」
宇垣の発言には明らかに矛盾があったが、それを指摘するものはいなかった。宇垣の目は澄んでおり、すでに死を受け入れたその瞳は全ての反論を拒絶していた。

斉藤は悟った。宇垣がなぜあえて勅命に逆らい、あたら命をすてるのか。
彼がもっとも恐れているのは、全軍が混乱状態から抜け出せぬまま無秩序に米軍へ攻撃してしまうことなのだ。
米軍はそれを理由に更なる殲滅作戦をかけてくる。日本は混沌の中で死者を積み重ね、敗戦後、日本を日本たらしめる原動力を失うかもしれぬ。
それを避けるため、「最後の特攻」を全軍環視の中で行い、もって総軍の「けじめ」とし、「区切り」とせんとしているのだと。

「敬礼ーっ！」

泣き出すものもいた。呆然と、ただ手を挙げただけのものもいた。同じ軍隊とは思えぬほど、その敬礼はばらばらだった。

それをとがめるべき立場にいる宇垣は、しかし何も言わなかった。ただその「黄金仮面」をもって将兵たちを見渡すのみだった。

１時間後。
飛行場に引き出された彗星艦爆のエンジンがかけられた。
１１基の「金星」エンジンが轟音をとどろかせる。

訓示の直後、参謀長の横井少将ら幹部は宇垣のもとに押しかけ、出撃を思いとどまるよう説得した。
酒井大佐などは「代わりに自分が」と進言し、決死の形相で翻意を迫ったが、「君では貫禄が足りん」と、一言のうちに撥ねつけられてしまった。
戦争の「けじめ」とするからには、日本軍全員に相当の心理的印象を与えなければならない。総軍粛然として襟を正す、それほどの衝撃が必要なのだ。
一大佐の特攻など、一時世間を騒がすことがあっても、敗戦の混乱の中で埋もれるのがせいぜいだ。高官、たとえば最前線の最高司令官の「戦死」と引き換えに、初めて全軍の秩序は取り戻されるだろう。一言の裏に、宇垣はそう言っているのだ。
彼らをあしらいながら、宇垣は関係書類を整え、部署に指示を出し、名乗り出た２１名の隊員に訓示を行い、彗星の後部座席に乗り込んだ。

「帽振れー！」

宇垣中将の搭乗する一番機が動き出すと同時に、飛行場脇に整列した将兵は一斉に帽子を取り、力の限り振った。
風防を開け、敬礼する宇垣。その視線が一瞬、斉藤を捉えたような気がした。

後を頼んだぞ。

一瞬の交感は、あるいは斉藤の思い込みか。
日本人八千万の、皇軍三百万将兵の、大分航空隊の、そして斉藤の想いを持ち去るかのように、彗星艦爆は高々と飛翔した。

四年間の激闘のあとには、ただ巨大な入道雲が浮いているのみだった。

十章　敗戦、そして（後書き）

高原と斉藤の闘いの物語は、これで完結となります。
数度にわたり完結を遅延しながら、見捨てず見守ってくださった方々、本当にありがとうございました。
なお、物語はここで一度区切りとなりますが、生き残った斉藤の前には長い人生が待ち受けています。近々、終章を書くつもりですので、今しばらくお待ちください。
ここまでお読みいただいた皆様、改めてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9687a/

護国の鬼

2010年10月9日16時45分発行